

---

# Black.Life

雷撃ぶち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Black・Life

### 【Nコード】

N3527BA

### 【作者名】

雷撃ぶち

### 【あらすじ】

私はトラックに轢かれた。頭を強打し、薄れゆく意識の中で、何か大きな獣が吠えたような音が聞こえると、私の意識が闇の中へと消えていった。そんな時、私は目を覚ました。黒い鱗、大きな黒い翼を持った、ある国の歴史上人間と対立した『ブラックドラゴン』として。——そんな『ドラゴン』の私は、人を食ったり、頑張つて人間になりきったり、人間になった瞬間王子様に結婚の申し出が出たり、ドラゴンになった瞬間討伐隊に襲われたりしますが、私は『ドラゴン』らしく、立派に生きていきたいと思えます。

1・お食事中。ご飯にケチをつけない。(前書き)

この小説には残酷な表現があります。苦手な方、無理な方は今すぐバックをお願いします。

## 1. お食事中。ご飯にケチをつけない。

私は食っていた。果物、お肉、お魚を食べているのではない、私は『餌』を食っていた。それはもう美味。とろけるようなあの肉、そしてこの血に含まれた魔力と恐怖！この美味の8割くらいはこの魔力と恐怖だと思う。旨い。

私は逃げ惑いながら泣き叫ぶ『餌』を大量に口の中に入れて、それを一気に噛み砕いた。．．マズイ、恐怖の味はさすが魔力が全然ない。まあ有難く頂きましょう。

『餌』の味を堪能した後、ごつくん、と喉を鳴らし、誰もいなくなった森を見渡す。昔はこの『狩り』を嫌がったが、慣れたもんだな、と思う。私は口の周りについた血を舌で舐めあげた。

私はふと、昔を思い出した。

「ねえ、ドラゴンって興味ある？」

こいつは何を言っているのだろうか。

17という年になって、妄想の産物に興味があるのか。ガキンちよか、お前は。

私の目の前にいるこのツインテール女、相沢ほのかは私の親友であり、未だに子供っぽい趣味から抜け出せないという。ちなみに、こいつは異常にテンションが高いせいか、転んで脳しんとうを起こし病院送りにされ、足を捻じ曲げて骨を折ったことがある。つい最近だって骨を折ったらしい。

「．．興味無いよ。アンタ、まだ妄想の産物になんて興味あんの？」

「いいじゃん、人が何かを興味を持とうと、勝手じゃーん！」

ほのかは頬を膨らませてふくれっ面になる。私は呆れ、この話題を変えようと何か別の話題を考える。

突然、視界が真っ白になった。紙．．．だろうか。どうやらほのかは紙を私の顔に押さえつけているらしい。

「ほら見てよ！これがドラゴンよ！」

ほのかに言われ、よく紙を見ると何か絵が描いてある。角、鱗、牙や爪、翼を生やした何かトカゲみたいなヤツ。口から炎を吐いている。結構上手く描いてある。多分、ほのかが描いたのだろう。ほのかは描いた絵は一回、30万で売れたそうだ。

「へ、へえ。それで？」

「んもう！反応薄いなあ！」

そう言っ紙を放すと、ほのかは鼻を鳴らして先に行ってしまった。怒ったのだろうか。ドラゴンが描かれた紙が、私の足元に落ちている。

「なあに勝手に怒ってるんだよ．．．」

私はこんなことで怒るほのかにますます呆れ、紙を手にとって見る。こんなの現実にいたら、絶対人とか食われるだろ．．．。

何だかドラゴンが存在しないことに、変な安心感がした。本当に良かっただろうなあ。今頃血の惨劇が世界中で起きてるって。

私は紙をスカートのポケットに適当にしまうと、さっさと歩き始めた。夕日が道路を、妖しくオレンジ色に染めていた。

自宅まで後数キロという所で、ある横断歩道に差し掛かった。信号が赤になるまで柵に寄りかかる私の前を、たくさん車が通り抜けていく。やがて赤信号が青に変わり、私はちよつと遅めに下を向いて横断歩道を歩き出した。

——私は気づかなかつたのだろう。この歩行者用信号機が昨日の大

雨で小さな故障を起こしかけて、青信号が赤に変わる時間が早くなっていたこと。私が横断歩道の途中まで来ていた所で、もう青から赤になっていたこと。そして、もう私の横に大型トラックが迫っていたこと。

ブー、というトラックの警笛に、私はやっと気づいた。が、もう遅かった。私は、派手に轢かれ、派手に飛んでいた。

視界の中の世界がぐるぐると回る。オレンジ色の空が下になり、上になったりと動く。そして私は、コンクリートに頭を強打した。

薄れゆく意識の中で、私のじんじんと痛む頭に何かが聞こえた。耳から入った音じゃない。頭の中で、聞いたことのない大きな獣が吠えたような音が聞こえると、まるでスイッチが切れたように私の意識は闇に消えた。

それ以降、何も覚えていない。

ぼんやりとしていた私は女性の叫び声で意識を現実に変えた。何事かと思いきや、白い頭巾を頭に巻き、古い服を着た老けた女性がこちらを指で指している。指で指すなぞ、失敬な。

「『ドラゴン』よ！誰か助けて〜！！」

私はニンマリと笑うと、その女性をじいっと見つめた。魔力も豊富で、恐怖も十分。デザートととして、それはそれは最高級な食材が出て来たのだ。味わったことのない美味だと思つと、満腹だった腹が鳴る。

私は戸惑いなくその女性を食した。口に広がる味わったことのない美味が広がり、思わず目を細めてしまう。”デザート”をよく味わい、喉を鳴らし、胃に流した。げぶ、と満足して、私は言うのだった。

「」馳走様と「」

1・お食事中。ご飯にケチをつけない。(後書き)

ドラゴンの主食は人間でした。(魔力・恐怖が好物)



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3527ba/>

---

Black.Life

2012年1月9日02時49分発行